

第57回神奈川建築コンクール 住宅部門 最優秀作品選評「柿畑のサンクン・ハウス」

審査委員 内田 青蔵

その住宅は、小田原から少し離れた住宅地化された農業地の一郭に、生産緑地に指定された柿の木からなる緑地に囲まれるかのように建っていた。正確には、南側と西側には住宅が並び、敷地の東と北の2方向に柿畑が広がるだけだが、それでもまるで柿の木々に囲まれているような強い印象を受けた。その思いは内部に入ると一層強く感じられた。それは、まさしくこの住宅が周辺環境と一体化することを意図的に計画されていたからであり、その独特な計画性こそ、デザイン性や住まい方の提案とともに審査員の間で最も高く評価された特徴であり、最優秀作品となった理由である。

改めて、作品を見てみよう。住宅の4周の壁はすべてガラスで、手の届きそうな低いフラットルーフの上には、2階となる小さなキュービックな小屋が載っている。フラットルーフを支えているのはガラスの室内側に建つ直径42.7mmの細いスチールパイプ。屋上にも細いスチールの手摺が廻り、一見すると、緑豊かな公園の中の軽やかなフォリーのようにも思える。内部は、床が地面より70cm低く設けられている。その効果もあって、内部からの風景は、まるで柿林の木々に覆われた空間で生活しているかのようなのである。ガラスもフィックスではなく、柿畑に面する東南隅の窓を開けると、涼しげな気持ちの良い空気が流れ込み、まさに、内外の区別のない空間が体全体で体感できる。

間取りは、中央部に収納部とトイレと階段からなるコアがあり、そのコアを囲むように間仕切りのない開放された空間が生活の場となっている。ただ、コアを囲む壁は建具を兼ね、用途に応じて連続した空間を閉じたり開いたりし、自在な生活が展開できるように工夫されている。これまでのコアは構造体を兼ねた閉じたものが一般的であったが、ここではコアが開かれ、収納部や動線処理の通路となるなど、生活の場を支える新しいコアが提案されている。生活の提案にもこうした斬新さが見られ、生活という観点からも最優秀作品に相応しい提案がなされているのである。家族は、若夫婦と幼い子供が一人。新しい生活の提案は得てして、子供が大きくなった時に破綻をきたすことが多い。しかしながら、この住まいを見ていると、施主の住み熟していく姿勢はもとより、そうした問題进行处理できるポテンシャルもこの住まいには感じることができる。それもまた、この住まいの魅力のひとつであろう。